

12月月例集会校長講話要旨

○まもなく2023年が終わります

今年を振り返ると、パンデミック、世界的なコロナ禍もようやく収束を迎え、恐る恐るといった感じでしたが、日常の生活が戻ってきました。学校の行事も予定通り進行することができました。

とくに3年生は、来年4月から大きく環境が変わりますから、この冬休みの時間を生かしてこれからの自分の未来、展望を考えてください。

○「常識」を疑うこと

12月8日に東洋大学の附属高校や関係する学校の先生方に集ってもらって研究協議会を行いました。これは来年、2024年8月末に本校で開催される「第29回全国私立大学附属・併設中学校・高等学校教育研究集会」（略称「附属校サミット」）に先駆けて、その準備として実施しました。

本校での研究協議会の研究主題は「アフターGIGA時代の哲学と探究—なぜ、なぜ、なぜ！の追究—」としています。その狙いは、アフターGIGA時代を生き抜く皆さんにとって必要になる資質・力とは何か、その根幹に本校の建学の精神に基づいた「哲学」を据え、「なぜ、なぜ、なぜ」の考え方を身に付けてほしいからです。

今あるものを固定した捉え方・考えでそれがすべて正しい、「常識」として、考え方の前提としないでほしいと思います。なぜこうなるのか、なぜこうなっているのか、を考えて、では、この目的のために必要な手段・方法は何かを出発点から考えてほしいと思います。

○クリスマスについて考える

3日後の12月22日は冬至（冬に至るという字です）になります。日中の時間が最も短く、これから少しずつ昼の時間が長くなり、春を迎えます。

「冬来たりなば 春遠からじ」厳しい冬を乗り越えて、希望に満ちた春が来る願いがあります。

12月25日はクリスマス。キリストの生まれた日として知られていますが、よくよく考えてみると、クリスマスの様々な行事や習慣は、色々な国や地域の習慣・風習が混ざり合っています。

まず、イエス＝キリストはどこで生まれた人でしょうか？

説明は難しいのですが、砂漠の国の生まれです。国際情勢で最も危険であり、現在はウクライナ情勢より世界中が注目しているイスラエル・パレスチナ地域で生まれました。キリスト教・ユダヤ教そしてイスラム教、3つの宗教の聖地は、現在のイスラエル共和国のエルサレムです。イエスはそのエルサレムで亡くなりました。

次にクリスマスツリーとして飾り付ける樅の木は、砂漠にあるのでしょうか？砂漠にはありません。ずっと北の地域、ヨーロッパ地方の亜寒帯に生える樅の木がクリスマスツリーです。寒いヨーロッパ大陸の樅の木がなぜクリスマスツリーになったのでしょうか。

これはキリスト教の信仰が本格的にヨーロッパに広がっていったときに、ヨーロッパに住むゲルマン人の古くからの冬の風習・信仰と結びついてクリスマスツリーが生まれたと考えられます。クリスマスツリーの原型は、北欧に住んでいた古代ゲルマンの「ユール」という冬至の祭で使われていた樅の木です。冬でも葉を枯らさずにいる樅は生命の象徴とされていました。

サンタ＝クロースの故郷は、さらに北にある、フィンランドです。中でも北極圏のラップランドといわれています。トナカイにひかれた雪ぞりで、プレゼントを配ってくれることになっています。これも砂漠で生まれたキリストとはもともとは無縁です。

サンタ＝クロースのモデルの1つは、4世紀のトルコの聖ニコラスといわれています。その信仰がヨ

ヨーロッパに伝わり、聖ニコラスをお祭りする儀式では「良い子」に贈り物をする、プレゼントをする習慣になったといわれています。もう1つのモデルは、歳神様です。冬至ー12月22日が最も昼の時間が短い日です。冬至を1年の終わりにとらえ、冬至を超すと、昼の時間が少しずつ長くなるので、新しい年になるという考え方があります。この考え方は世界各地にあります。冬至の前後に幸福をもたらす新年を迎える歳神様として、やってくるものがサンタ＝クロースのもとになったといわれています。日本では秋田の「なまはげ」などがそれに当たります。

冬至、夏至、春分の日、秋分の日は何を意味するのか、古今東西多くの人類は、1年間の太陽の進行について強い関心を持っていました。冬至は最も昼の時間が短く、徐々に昼の時間が長くなり、春分の日で昼と夜の時間が半々になり、夏至で昼の時間が最も長くなります。ここから昼の時間が徐々に短くなり秋分の日を迎えます。「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があります。彼岸の日（春分の日、秋分の日）のころ、天候は安定し昼夜の時間は半々になります。したがって、この4つの日については関心が高くなるのは日本列島に住む人間だけではないのです。

クリスマス話に戻ります。サンタ＝クロースの衣装の色は、イングランドでは緑色もありますが、何故赤いのか？

これはアメリカの飲料メーカーコカ・コーラ社が自分の会社のシンボルカラーの赤でサンタ＝クロースを登場させたことで、サンタ＝クロースのイメージを統一させたとコカ・コーラ社の公式見解ではなっています。しかし、コカ・コーラ社がサンタ＝クロースを広告のシンボルとして登場させたのが、1931（昭和6）年です。

日本では、1907（明治40）年12月28日の朝日新聞の記事で「赤い衣装をまとった…」、1914（大正3）年12月号の子供雑誌「子供之友」では、現在のサンタ＝クロースと同じ絵が描かれているので、これはコカ・コーラ社の宣伝のための「都市伝説」ということになります。テレビ番組などでは、サンタ＝クロースの衣装の色はコカ・コーラ社によって赤色になったとよく紹介されていますが、そうではないということが分かります。

こういったことは今から25年前、1998年に発行された岩波新書の「サンタ＝クロースの大旅行」で解説されています。2019年に出版された「愛と狂瀾のメリークリスマス なぜ異教徒の祭典が日本化したのか」という講談社現代新書では、日本の近代のクリスマスのはしゃぎ方、騒ぎ方が当時の新聞の記事をもとに紹介されています。1936（昭和11）年の二・二六事件があった年のクリスマスまでは、非常に派手に行われ、銀座では「もみくちゃクリスマスイブ24日宵、いわゆるクリスマスイブである。この宵、カフェでは怪しげな紙製の帽子を出し、人はこれをかぶって酒を飲んだり踊ったり散歩したりする。…とんがり帽をかぶり、クリスマスデコレーションの下に多くの人が集まり底抜けの騒ぎを繰り広げ、ただ市電だけがひっそりとしていた」というのが朝日新聞の12月25日の記事にあります。戦前では、1937（昭和12年）の7月の盧溝橋事件から始まる日中戦争でいったん静まり、終戦までの8年間はクリスマスの騒ぎはできなかったが、戦後はすぐに派手なクリスマスの騒ぎ方になった、と紹介されています。興味のある人はぜひ調べてみてください。

ある出来事や事柄について、簡単に受け入れないで、そのまま鵜呑みにせず、立ち止まって自分できちんと調べ考えてみる、これから様々な体験をしていく中で、身に付けてほしい姿勢です。

また、クリスマスに限らず、今、我々がやっている様々な年中行事の由来を知ること、そしてその意味を知ることでも大切なことです。その上でその行事を過ごすことが大事です。年末年始には様々な行事や習慣、それぞれの家庭での習わしなどがあります。

この時期は家族が一緒になって行動することも多いと思います。ぜひその由来や意味を知った上で体験してみましよう。